



RIFS通信

NUMBER
37

平成20年4月14日発行

■ 目次

1. 活動内容

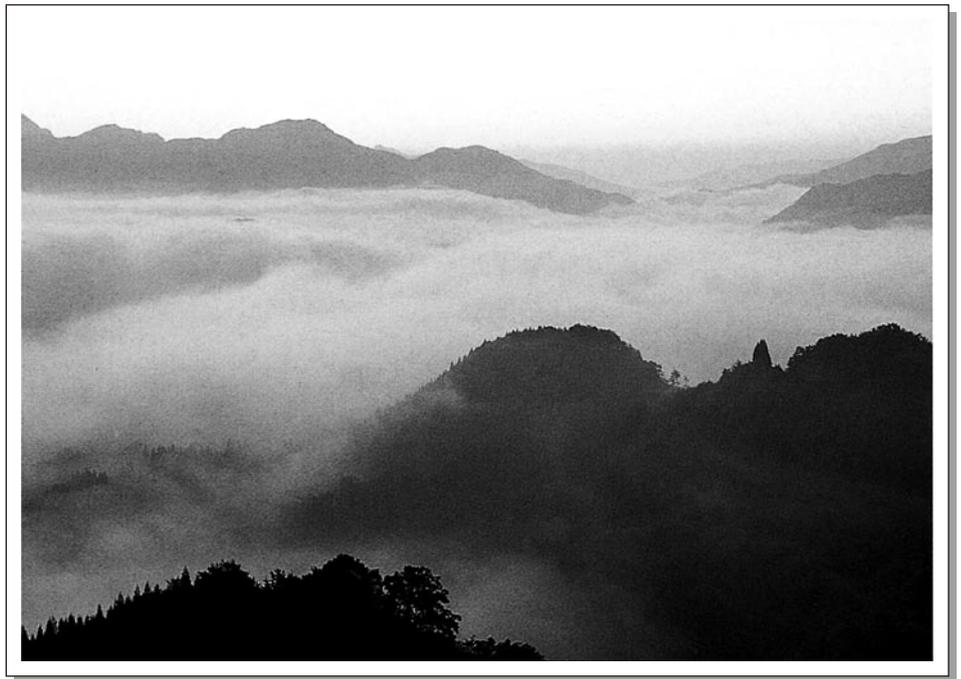
2. 韓国迎春

..... 栗林 純夫

3. 自然法爾と即得往生

—親鸞思想の根本—

..... 荻原 樂



活動内容

研究交流事業

- ・モンゴル開発研究センターとの共同研究
- ・企業倫理研究会
- ・中東報告会
- ・日本語教育セミナー
- ・カナダ SS HRC 科学研究助成研究プロジェクト

広報・出版事業

- ・RIFS通信、国際を考えるシリーズ

韓国迎春

東京国際大学経済学部 教授 栗林 純夫

昨年（2007年）10月に韓国に来てから5ヶ月が過ぎた。年末の大統領選挙も予想外に平穏に終わり、落ち着くべきところに落ち着いたという感じが続いている。旧正月に前後して大寒波が押し寄せたが、それもいささか和らいで、3月1日現在、人々の関心は新政権の内外政策の行方に集まっている。歴代政権では「当初順調、以後迷走」という行動様式が常であったが、今回、それを払拭できるのだろうか。同僚と雑談をしていると、水面下では様々な情報が飛び交っていることがわかり、興味深い。韓国には何度も来ていたとはいえ、さすがに長期滞在となると様々な発見があり、毎日新鮮な時を過ごしている。

最初の訪問

筆者の最初の訪韓は、1983年の5月であった。昔、朴大統領提唱によるアジア太平洋閣僚会議（ASPAC、1966年発足）という国際機関があった。共産陣営への対抗を意図したものであったが、日中国交回復などで次第に形骸化し、多くの加盟国が脱退。しかし、当時、文化交流部門は存続しており、訪韓は、これとの関連で「韓国・台湾と中国との将来関係を分析して欲しい」という、ある省庁からの要請によるものであった。

ソウルには2週間ほど滞在した記憶がある。中国民航機がハイジャックされて江原道の空軍基地に着陸という事件（両国初の外交ルート交渉）があり、ほぼ1年半前に中国留学から帰国したばかりであったので「なるほど世界は変化している」と感じた記憶が鮮明なのである。韓国の一人当たりGDPは約2000ドル、日本は約1万ドルであった。ソウル五輪（1988年）の準備がそろそろ始まるかという時である。「漢江の奇跡」（高度成長）が喧伝されていても、江南辺りには、まだ農村の雰囲気が残っていた。街には国産車ポニーが走り回っており、「自動車を作るまでになっているのか」などと感心したものである。

NEAEI

その後、他の要件で訪韓の機会が増えたが、90年代に入って発生した旧ソ連東欧の崩壊が一つの転機となった。このころ筆者は「北東アジア経済イニシアティブ：NEAEI」という

日・韓・中・露・米、そしてモンゴルという構成メンバーからなる開発協力のための共同研究組織を中心に活動を展開した。ソウル、ハバロフスク、ウランバートル、北京などで研究会や調査が頻繁に実施され、最初の北朝鮮訪問が実現したのも当時のことである。北東アジアにNEAという呼称を与えたのも、我々がおそらく最初ではなかったかと思う。一連の研究では、本学の江口英一、白須孝、高橋宏、張本浩、今井憲彦、金子勝などの各位にも大変お世話になった。

NEAEIでは、例えば投資促進という研究会を傘下に作るときは、各国の研究者が必ず一人は入るように運営した。この結果、多国籍メンバー間に強い信頼感が生まれ、それは現在まで続いている。またこのころの韓国の優れた友人達との出会いが、今回の長期滞在の一つの背景としてある。

金融危機とその後

韓国は、90年代に入っても、6～9%という高度成長を続けた。対外債務/GDP比率と外貨準備/総輸入比率はともに20%前後であった。問題は対外債務に占める「短期資金」のシェアが、初期の30%から96年には60%近辺にまで増大していたことである。東南アジア金融危機の煽りを受けたウォンの5割ほどの減価と短期資金の引き上げは、深刻な外貨不足をもたらした。成長率は97年に4.7%、98年にはマイナス6.9%と落ち込んだのである。

しかし、その後の立ち直りは早く、近年では4～5%近辺の成長率を謳歌している。対外債務/GDP比率は4割前後と高いものの、外貨準備/総輸入比率は8割近辺にあり、財政収支も黒字基調を続けている。金融危機から約10年。一人当たりGDPは大雑把にみれば韓国が約1.7万ドルで日本は3.5万ドルであり、最初の訪韓時の5倍から2倍へと縮小したことになる。情報・電子・自動車などの分野では世界的な企業も育っており、どうしても「韓国の人々は、よく頑張ったなあ」という感慨が湧くのである。

謎は残る

ただ、それでは生活関連支出が日本の1/2で済むかということ、そうではない。物価は、日本と同水準かそれ以上と感じることも多々ある。ソウルの物価はニューヨークのそれよりも高

いという新聞記事を読んだことがあるが、その通りなのである。

国内の投資資金を循環させるために不動産は値上がりを続け、これが全ての物価の押し上げに連動している。金持ちはより金持ちに、貧乏人は・・・というメカニズムが働いているように見える。インフラ整備も不完全である。例えば地下鉄駅などでは、エスカレータ等が少なく、長い階段が延々と続くといったものが実に多い。身障者や高齢者への配慮が不十分であることが身に染みてわかるのである。

おそらく、今後の十年前後をかけて、これらの問題の解消に努めることになるのであろうし、それを期待している。しかし、街を歩いていると、時としてやや懐疑的な念がよぎることもある。なぜなら歩道の作りだけは実に粗雑で、品質は25年ほど前と大差ないように感ずるところが多いからである。何を好んで突起物を残し、人が転ぶように仕向けるのかわからない。そこを若い女性たちがハイヒールを履いて歩くのも不思議といえば不思議である。さらに我が友人たちも「あれが歩道なのだ」と思い込んでいるようで、この話をしても一向に面白がらないのがちょっと不気味ではある。逞しい生命力を持ち、ちょっと頑固な人々、5000万人が織り成すドラマは、

どのような展開を見せるのだろうか。

かつてわが国は、中国大陸との直接ルートをもち、インド、中央アジアから中国に入り、そこで融合した当時の国際的な文化の吸収に努めた。しかし、韓国の祖先達が、中国文化を消化した上で、自らの固有文化とともに日本にもたらしてくれたことが、日本の文化形成に大きな役割を果たしたことも疑いない。その文化の恩人ともいべきこの国を、日本は覇道をもって遇したのである。慙愧の念に耐えない。高層アパートの一室から漢江の彼方に沈む夕日を見ていると「今度こそ、互いに尊敬し、信頼できる日韓新時代を開かねばならない。本当に平和な北東アジアを構築しなければならない」という思いが湧く。

日本から韓国への訪問者数は年に250万人前後であるが、友人の話では、昨年韓国から日本への訪問者数は日本のそれを超えたという。両国の国民レベルの交流深化は想像以上に進んでいる。

(経済学部教授、韓国延世大学校に客員教授として滞在中)

自然法爾と即得往生 —親鸞思想の根本—

東京国際大学商学部 教授 荻原 欒

日本人による思想形成を論じる場合、仏教ははずせないし、なかでも、親鸞、道元は、その問題の根源性、攻め口の論理性からいって、特筆すべきものと思う。ここでは、親鸞について、「自然法爾(じねんほうに)」と「即得往生」の2つの話題を、広い意味での自然観と死生観の問題として取り上げ、いささか我流ではあるが解説したい。

自然法爾は親鸞晩年の思想である。私たちの生きているこの世界を自然法爾の世界として捉えようというのが親鸞の立場になる。晩年の法語と書簡を集めた『末燈鈔』に次のようにある。「自然というは、もとよりしからしむることばなり。弥陀佛の御ちかいの、もとより行者のはからいにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまいてむかえんと、はからせたまいたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともおもわぬを、自然とはもうすぞとききてそうろう。「しからしむ」というは、行者のはからいにあらず、如来のちかいにてあるがゆえに、法爾という。法爾というは、この如来の御ちかいなるがゆえに、しからしむるを法爾というなり」。

解説を施せば、「自然」の「自」は、「もとより」の意味であり、「もとより」とは、「行者のはからいでない」、「行者のよからんとも、あしからんとも思うことのない」ことである。「法爾」の「法」は、ここでは「如来の御ちかい」のことであり、上の引用に「行者のはからいにあらずして、如来の誓いにて」とあるから、これもまた、行者のはからいにあらざるものである。念のため言えば、ここで、行者とは私たちのことであり、如来とは、阿弥陀如来(阿弥陀仏)である。然も爾も「しからしめる」という意味だが、分かりやすく、そのようにしからしめられた状態、世界を示す語としておく。すると、「自然」とは、もとよりの世界、「法爾」とは、如来の誓願の世界、となり、ともに行者のはからいを離れた世界であるから、合わせて、自然法爾とは、「如来の御ちかいによる、行者のはからいを離れた、もとよりの(おのずからなる)世界」のことである。ここで、自然の世界は、行者のはからいを離れた世界であるが、行者のはからいを離れるためには、世界を、弥陀の誓願によるところの世界、つまり、法爾の世界としなけ

ればならない。それは、親鸞のあるいは浄土信仰の根本論理である。

これに対して、私たちの普段生活しているこの世界は、行者のはからいの世界である。そこには私たちという自我が存在し、それがことごと一切仕切ろうと、動きまわる。一方、親鸞の世界は行者のはからいのない自然法爾の世界である。この違いはどこにあるのだろうか。私たちは日常、自分の生きている世界を、自分のものだと思っている。それが、私のはからいということである。自然法爾の世界は、弥陀の誓願による、弥陀の世界であり、したがって、私のものではない。分かりやすく言えば、普段の我々の世界は私のもの、自然法爾の親鸞の世界は弥陀のものであり、所有者が、私から弥陀に移っているのである。そこが違う。

下世話な喩えで言えば、私たちの普段のこの世界、そこでの生活は、自分の持ち家、あるいは、持ち家に生きるようなものである。所有者が自分だから、何をしようと自分の裁量であり、どのように改造しようと、どのような生活をしようと、勝手である。しかし一方、自分の家は、壊れれば自分で直さなければならない、固定資産税も支払わなくてはならず、引越そうとしてもなかなかふんぎれない（あるいはできない）。これに対して、弥陀の世界では、私たちは借家に住むようなものである。借家の場合は持ち家に由来する面倒はない。壊れれば大家さんが直すし、税金は不要で、気軽に引越してできる。しかも、弥陀という大家さんは、規模の大きい大家さんであるから、どこへ引っ越しても、そこの大家さんもまた弥陀であって、いい人だし、旧知であり、気が置けない。すべからく借家に住まうべしである。にもかかわらず、私たちの普段の生活は、持ち家志向である。苦勞しても持ち家を望む。あるいは、持ち家ゆえに、いらぬ苦勞をする。

仏教の根本問題は、この「私のものである世界」から、どのようにして、「私のものでない世界」に渡るかである。浄土教は（親鸞は）、そこに、「阿弥陀仏」と「信心」という仕掛けをおく。それによって持ち主を私から弥陀に変えるのである。持ち主が変わることによって世界が変わる。ただ、世界が変わると言っても、場所が変わったり、ものが変わるわけではない。材料は同じとしても、持ち主を誰と見るかによって、あり方が変わってくるのである。弥陀のもとでは、同じ行者のはからいも、行者のはからいではなくなる。

次に、「即得往生」である。これについては、例えば、『唯信鈔文意』に「即得往生とは信心をうればすなわち往生すという。往生すとは不退転に住するをいう。・・・即はすなわち

という。すなわちとは、ときをへず日をへだてぬをいうなり。」とある。

往生とは、本来は、死んだ後に極楽浄土に往くことである。だから、往生は現実の死の問題である。しかし、私たちにとっては、実際に極楽に往かなくても、往くことの出来る保証が得られていればそれでよい。生きている者にとって死とはそういう問題である。その保証がなされているというのが、「不退転に住する」という言い方である（正定聚の位につくとも言う）。そう理解した上では、即得往生とは、「信心をうれば、即ち、往生する（不退転に住する）」ことである。信心とは、もとより、弥陀の誓願に対する信心である。

普段の生活（行者のはからいの世界）の中で、私たちは、生と死を分けて考えている。生活とは、当たり前だが、「生」の生活である。したがって、「死」はその外のことがらになる。外のことがらとなると、内なる生の論理で説明できないことになり、それ故、死は、生の生活にとって、不安材料なのである。その不具合について、即得往生は、「信心をうれば、即ち、不退転に住する」と言う。不退転に住した上は、必ず、極楽に往けるのだから、これは、第一に、ある意味で、世の中に死というものは無いという立場である。全員が往生できるのだから、少なくとも、極楽に往けないような、不安材料であるような死はないことになる。浄土教的には、これによって、外なる死の問題（不安）は解決されたわけである。ここはまた、第二に、こうも考えられる。不退転に住するとは、不退転という形で、すでに往生の（死の）保証を得ていることである。私たちは現に生きているのだが、すでに往生の保証を得ている、これは生きながらにして死んでいることでもある。下世話に言えば、死亡診断書や埋葬許可証を先にもらった上で、生きるというようなものである。こういった見方もまた一つの死生観である。

ただし、ここで、不退転に住するためには、「信心をうれば」という条件がある。そして、この信心という条件は、先の、私たちの普段の世界から自然法爾の世界に渡るための条件でもあった。したがって、自然法爾の世界は即得往生の世界でもある。かくして、世界のあり方の問題と生死の問題が同じ論理によって解決されることになる。

自然法爾、即得往生について、形式的な説明は以上に尽きるが、それに実質を与えるのは我々の信心であり、その信心の正しさと、深さである。それはまた、具体的な生き方の問題でもある。